

《第二十章・集合を考察する。》

第二項 [時が本性として有る理由を否定する] に二項目がある。[時は果が起こる俱有縁<sup>1</sup>であることを否定する]、[時は果が生起し壞す因であることを否定する]である。

第一項 [時は果が起こる俱有縁であることを否定する] に三項目がある。[章の著述を説く]、[了義の教証と合わせる]、[意味を要約して章の名を示す] である。

第一項 [章の著述を説く]

ここに言う。「時は本性として有る。(何故ならば) 果が起こることに対して俱有縁である故である。ここで、種子と土と水等の他の縁が集まろうとも、時の特性が近く関わらなければ生じないが、近く関われば生じることと、

『外界のように内部でも、集まり時が来れば、まさしく果として熟すとなる。』と、果が生じることは時に相互関係していると説かれた。」

これを否定するにあたり三項目がある。[因縁の集合より生じることを否定する]、[因そのものより生じることを否定する]、[因縁の集合より生じることを否定する他の正理を示す] である。

第一項 [因縁の集合より生じることを否定する] に三項目がある。[以前の集合より生じることを否定する]、[同一時の集合より生じることを否定する]、[後時の集合より生じることを否定する] である。

第一項 [以前の集合より生じることを否定する] に二項目がある。[集合より直接生じることを否定する]、[集合より間接的に生じることを否定する] である。

第一項 [集合より直接生じることを否定する] に二項目がある。[集合における有・無が生じることを否定する]、[集合において有無そのものを否定する] である。

第一項 [集合における有・無が生じることを否定する]

芽が種子等の因と縁の集合から生じるならば、集合に留まる(住す)果であるものが本性として生じるのか? 留まらない(不住の)ものが本性として生じるのか?

「もし、諸因縁の集合そのものより果が本性として生じるとなり、因縁の集合に

<sup>1</sup> 俱有縁: 結果の質的な原因と共にある条件。

「因縁」という時、「因」は結果の質的な原因。「縁」はその「因」を助ける条件。

果が有るならば、如何様であれば因と縁の集合そのものより果が本性として生じようか？」といい、生じない。(何故ならば、因縁の集合は) 果と所依 (拠所)・能依 (依るもの) である故に、例えば銅盆に入ったヨーグルトの類を、銅盆が生じさせぬが如くである。

他にも、有は既に成立しているので、目前の壺の如く再度生に相互関係することは無い。

もし、「因縁に果の本性が留まるものを、縁が明らかにするので、存在していても生じることは意味が有る。」といえよ。

明らかなものが先に有るならば、再度生じる必要はないが、(明らかなものが) 無ければ、先に無いものが生じる説となる。

「もし、諸因縁の集合そのものより果が生じるとなり、集合に果が留まることが無いならば、如何様であれば集合そのものより果が本性として生じようか。」といい、生じない。(何故ならば) そこに無い故に、砂より胡麻油の如くである。

要約すれば、果が本性として有るならば生じる必要は無く、集合に無ければ、本性として生じさせることはできない。

#### 第二項 [集合において有無そのものを否定する]

他にも、もし諸々の因と縁の集合に果が依拠する面より有るならば、集合に四量<sup>2</sup>何れかによって認識される対象として有る必要があるが、集合そのものに量によって認識される対象として無いので、そこに、銅盆にあるヨーグルトのようには無い。

仮にまた、『そこに無い何かは、それより生じない。砂より穀物油の如くである。果とは集合より生じるのであり、それ故に、集合より果が有ると、比量から成立した。』と思えば。ならば「何かに存在する何かは、それより本性として生じない。銅盆よりヨーグルト類の本質の如くである。」という比量によって、「集合に果が無いと成立する。」と、何故捉えないのか。

『何? 双方ともに比量に反するので、集合に果が有ることは正しくないが如く、果が無いことも正しくない。』と思えば。

我々は、果が因縁の集合に無いことが本性として成立したと論証するのではない。

<sup>2</sup> 四量：四種の正しい認識、或いは正しいと認められる理由。

- ① 現量<sup>げんりょう</sup>：概念作用によらない正しい知覚。青色を見る眼識等。
- ② 比量<sup>ひりょう</sup>：理由を考察することによって了解する正しい知覚/概念作用。「生じたもの」という理由から、音声が無常であると了解する思考等。思考・概念作用は意識に含まれる。
- ③ 聖教量<sup>しょうきょうりょう</sup>：信じ得る何者かが説かれた言葉と、それによって正しく知る知覚/概念作用。經典の言葉「○○。」等と、それによって○○であると了解する思考等。
- ④ 譬喩量<sup>ひゆりょう</sup>：類推。ここにいる動物は「牛」と呼ばれ、あちらにいる動物もこれに似ているので「牛」であると了解する思考等。

しかし、集合に果が本性として有ると他派が考察したことを否定する。その如く、我々は集合に果が本性として有るとは論証しないが、他派がそれに果が無いことが本性として成立したと考察したことを排斥する。(何故ならば) 有無の二極辺を斥けて中の道を論証しようと欲す故である。

もし諸々の因と縁の集合に果が無ければ、芽の諸因や緒縁も因や縁ではなく、火や炭等と等しくなる。(何故ならば) 果が無いと等しければ、芽の因縁である・ないものとして自性として有る・無いも等しい故である。

#### 第二項 [集合より間接的に生じることを否定する]

「ある理由から集合に果の有無を分析することになる、因と縁二つの集合に、果を直接生じさせる能力は無い。しかしながら、縁の集合が直接因に役立つことのみをし、その因によって果が生じさせられる為に、因の一部の効力を果に与えて滅し、その(効力を)与えた因が役立った果をも生じさせる。」といえよ。

もし因が果に能作因を与えて滅すとなれば、果に与えられた能作因と、滅した因の我性のそれぞれ二つの実在物となるだろう。それは正理ではない。(何故ならば) 与えた因は(果が)生じたもとでも自らは留まるので恒常であり、滅した因は無常となる故と、一つの因に恒常・無常の二つは反する故である。

もし、まさしく一つの因がそれぞれ二つの実質に変化することを斥ける為に、因が能作因を与えずに一切の我性が以前に滅したとなれば、因である種子のようなものが滅した後で、生じた果である芽のようなものは、因である種子より直接生じたことは無いのみとなるので、因無くして起こるとなるだろう。

もし、『芽の以前に、種子の因が丸ごと滅したか、滅した・滅していないという二つの部分の何れかとなるこの考察は、如何様なものであるか』と思えよ。

滅したことが自らの性相として成立した説であれば、芽の以前、種子が滅すことに向かっている時、滅した働きが完了していなければならない。(何故ならば)「滅した」とは滅したとなるだろう事物の性質であるが、本性として成立した性質と性質を持つ主体は、如何なる時も離れない<sup>3</sup>故であり、生を真実であると主張すれば、生じることに向かっている時に、生じるだろう事物が成立していなければならぬが如くである。

#### 第二項 [同一時の集合より生じることを否定する]

「もし、果が自ら以前の因より生じることに於いてこの過失となるならば、果と一緒に生じた因縁の集合のみが、果を生じさせるものとなり、例えば(光と)同一時の灯明が光を生じさせる如くである。」といえよ。

<sup>3</sup> 離れない：『正理の海』ゴマン版では「mi 'brel ba 関係しない」とあるが、前後の文脈から「mi 'bral ba 離れない」と訳した。

もし因縁の集合と一緒に果も生じるとなれば、生じさせるものである因と生じさせられる果であるものの二つが、同時である背理となるが、黄牛の左右の二本の角は生じさせられるものと生じさせるものとして見られないので、それは正しくない。

第三項 [後時の集合より生じることを否定する]

毘婆沙部のある者は、「諸事物が以前に起こっていないものより生じることは無い。(何故ならば) 無因の突然である背理となる故である。それ故に、果は、因縁の集合以前の時点で未来時にも留まるのであるが、因縁の集合が、それを現在時点で生じさせる。しかし実質は前後時(両方)にまさしく留まるのである。」という。

もし、因縁の集合以前に果が生じた一既に成立したとなれば、その果は諸々の因と縁に相互関係したことが無くなるが、そのようであれば自らの因無くして起こるとなるだろう。

第二項 [因そのものより生じることを否定する] に二項目がある。[因果は同一本質であるという説を否定する]、[因果は別本質であるという説を否定する]である。

第一項 [因果は同一本質であるという説を否定する]

ある者は、「果は因のみが生じさせる。因と縁の集合によってではないけれど、果に能作因を与える・与えないという過失ともならない。(何故ならば) 因そのものが滅して果の我性として尽く留まる故である。」という。

もし、因が滅したならば果が生じるけれど、それも因の我性のみであると考えれば、踊り子が他の衣装を脱ぎ棄てて他(の衣装)を受け取るように、因は全時点において移行するのみとなるが、以前に無い果が生じるのではなくなる。それ故に、因が恒常となるが、それは正理ではない。(何故ならば) 恒常である事物は有るのではない故である。

他にも、以前に生じた因も、再び生じる背理となる。(何故ならば) 最初の因時と、後時の果時の二時点において生じる故である。それも正理ではない。(何故ならば) 生じる必要がない故と、生が無限になる故である。

第二項 [因果は別本質であるという説を否定する] に二項目がある。[因が、果が生じる行為を準備することを否定する]、[因そのものが本性として有ることを否定する]である。

第一項 [因が、果が生じる行為を準備することを否定する] に七項目がある。[滅した因と、留まる因が果を生じさせることを否定する]、[因は、見て・見ておらず

に果を生じさせることを否定する]、[因が接して・接さずに果を生じさせることを否定する]、[果が欠如する・欠如しない因が果を生じさせることを否定する]、[空・不空である果を因が生じさせることを否定する]、[同一本性と別本性の因が果を生じさせることを否定する]、[自性として有る・自性として無い果を因が生じさせることを否定する]である。

第一項 [滅した因と、留まる因が果を生じさせることを否定する]

他にも、因が果を本性として生じさせるならば、果の以前に滅した因によって生じさせられるのか？滅していない因によって生じさせられるのか？果も既に生じた果を生じさせるのか？生じていない果を生じさせるのか？と考察される。

そこで、第一のようであれば「滅して消えた因—失壊したものによって、生じた果を如何様に生じさせようか？」といい、生じさせない。(何故ならば) 因が滅した時にその因は無いが、無も因として不合理である故と、既に生じた果は再び生じる必要がない故である。

もし第二のようであれば、「果と関係する、留まる因」—失壊していないので、「も」とは「果を如何様であれば本性として生じさせようか」といい、生じさせない。(何故ならば) 滅しておらず本性として成立したものが生じさせるならば、因は様相を変化せずに果が見られなければならないが、それは正理ではない。(何故ならば)『四百論』より

「因は様相として変化すれば、他の因となり」<sup>4</sup>

と説かれたように、果が生じたならば、因は様相として変化した必要がある故である。

もし、『既に成立した果は生じさせる必要はないので、因時において果と関わっていないものを生じさせる。』と思えば。

「因が、果であるものを本性として生じさせる」ということはしない。(何故ならば) 果を本性として生じさせるならば、因時においても関係しなければならぬが、そこで関係していなければ、自相として成立したものに単なる関係さえも無い故である。そのように、無関係の因が果を生じさせれば、たった一つの因によっても果であるもの一切を生じさせるか、あるいは果を何も生じさせなくなるだろう。

第二項 [因は、見て・見ておらずに果を生じさせることを否定する]

他にも、因が果を本性として生じさせるならば、因は果を見てか、あるいは見ておらずに(果を)生じさせるのか。

第一のようであれば、因は、自らの果が見てから生じさせることはしない。(何故ならば) 見るならば既に成立しているので、それは再度生じさせられる必要はな

<sup>4</sup> 「因は…なり、」:『四百論』第 9 章 9 偈前 2 行。

い故である。因は、自らの果を見ておらずに本性として生じさせることもしない。(何故ならば) そのように生じさせるならば、一つの因によっても、果である全てを生じさせることになる故である。

この「見る」とは何かといえ、これは世間において「認識する」と公称される。

「もし、種子等の根(感覚器官)の無い諸物においてこれはあり得ないのではないか?」といえ。

あり得ようとあり得なくとも構わない—我々にとって反論されるものではないが、果は本性として生じると言う者にとっては反論されるものとなる。然れば、種子等が見て生じさせると言え、*「それらによって果が見えるこのことは、世間において見られない。」*と言いたまえ。<sup>5</sup>

もし、見ておらずに本性として生じさせると言うならば、前述の如く述べたまえ。

諸衆生にはそれ以前に思し召しを放つ創造者が有ると言う、士夫等を因であると言う者や、種子等は同一の根(感覚器官)を持ち、思いを具えると言う耆那教徒達においては、この背理は翻らないので、過失は無い。

『般若灯論』で

「眼等が自らの識を生じさせるならば、その対象である色形等を認識して生じさせるのか、認識しておらずに生じさせるのか」

と、一部の因果を否定する説に合わせた。

### 第三項 [因が接して・接さずに果を生じさせることを否定する]

他にも、因が果を本性として生じさせるならば、その二つは接した—一緒に集まる必要がある。(何故ならば) そのようではない光と闇や、輪廻と涅槃においては、生じさせられるもの(果)と生じさせるもの(因)は見られない故である。

接したことについても、正理知で分析したならば、三時ともにおいても見出さるものではない。そこで先ず、過去である芽等の果は、過去である種子等の因と一緒に接したとなることは、いつ時も有るのではない。(何故ならば) その二つが失壊した時にはその二つは無い故と、種子と芽の二つの失壊が接したとしても、種子と芽の因と果が接したのではない故である。

その如く、過去である果は、未来である生じていない因と接したことはいつ時も有るのではない。(何故ならば) 果は失壊してから、因はまさしく生じていないので、その二つは無い故と、二つの時間は別である故である。

過去である果は、現在である生じた因と一緒に接したことはいつ時も有るのではない。(何故ならば) 二つの時はそれぞれ(別)である故と、失壊した果は、存在

<sup>5</sup> 然れば…言いたまえ。「世間において、芽は種子から生じることが見えるので、種子が本性として芽を生じさせる。」といい、更に「感覚器官の無い種子に、見て生じる等の考察は不適切である。」という者へ対して提示された背理か?

する果ではない故であり、石女の子と祭祀の如くである。

生じた一現在である果は、生じていない一未来であるその因と、過去と、生じた一現在である因と、一緒に接したとなることはいつ時も自性として有るのではない。

(何故ならば) 過去と未来である二つの因は、別の時である故と、現在である因と果の二つにおいて接したことが本性として有るならば、前後関係のある時は適わぬので同時に有る必要があるが、それは無い故と、既に成立した果が因によって生じさせられる為に接したと考えるならば、それにそれは不必要である故である。

生じていない一未来である果は、生じた現在と、生じていない未来と過去である因の二つと一緒に接したとなることは、いつ時も本性として有るのではない。(何故ならば) 過去と現在である因は、時が別である故と、因果の二つは未来の時に、その二つの何も無い故である。

そのように因果の二つを分析したならば、接したことが本性として有るのでなければ、因が果を如何様に生じさせようか。(それは) 生じさせない。

もしまた、因果の二つは本性として接したことが有るとしても、因が果を如何様であれば本性として生じさせようか一生じさせない。(何故ならば) 果と一緒に集合していなければ接したことは不合理であり、一緒に集まれば、再度生じることは無意味である故である。

#### 第四項 [果が欠如する・欠如しない因が果を生じさせることを否定する]

他にも、もし果が欠如する因が、如何様であれば果を本性として生じさせようか一生じさせない。そうでなければ、水とヨーグルトにバターが無いと等しいながら、ヨーグルトよりバターは作られるが、水からは作られないという違いが見付からぬ故である。

もし、自らの果が欠如しない因によっても、如何様であれば果を本性として生じさせようか一生じさせない。(何故ならば) 存在する果は再び生じない故であり、息子のある祭祀の如くである。

#### 第五項 [空・不空である果を因が生じさせることを否定する]

果が生じることも、本性として有ることが欠如しないものが生じるのか? 欠如するものが生じるのか?

そこで、本性として有ることが欠如しない果は、生じるとはならず一縁起生ではなく、本性として留まるのであるが、それに似た欠如しないものは本性に退転が無いので、滅すとはならない。それ故にその果は欠如しないと主張すれば、滅しておらず、生じていないともなるのであるが、そのように主張するのでもない。

「本性として有ることが欠如する果は、如何様であれば自らの自性として生じるとなろうか。如何様であれば本質として滅すとなろうか」といい、(そうは) なら

ず、虚空の如くである。それ故に、果は本性として有ることが欠如すると主張しても、自性として滅しておらず、生じていない背理ともなるが、君はそのようにも主張しない。

第六項 [同一本性と別本性の因が果を生じさせることを否定する]

他にも、「因が果を本性として生じさせるならば、二つを超えることは無いが、それも、因と果の二つが本性としてまさしく同一であるとは、いつ時も合理とはならない。しかし、因と果の二つが本性としてまさしく他であるとも、いつ時も合理とはならない。」と、主張命題のみを説かれた。

その理由とは、因と果の二つが本性としてまさしく同一であるならば、生じさせられるものである子や眼識や芽と、生じさせるものである父や眼や種子が同一となる故である。

因と果の二つが本性としてまさしく他であるならば、自相として、他として成立したものには相互関係が無いので、因であるもの・ないものは、因であろうとなかろうと等しくなる。(何故ならば) 無関係、別他の意味においては、因果である・ないと分け得ない故である。

第七項 [自性として有る・自性として無い果を因が生じさせることを否定する]

他にも、因が果を生じさせるならば、自性として有る果を生じさせるのか？(自性として) 無い果を生じさせるのか？

そこで、果が自性として有るとしても、因が何を生じさせようか。(それは) 生じさせない。(何故ならば) それを生じさせるならば、既に成立したものを再び生じさせなければならないが、既に成立したならば再度生じる必要は無い故である。

果が本性として無くとも、因が何を生じさせようか。(それは) 生じさせない。もし、「影像は本性として無くとも因が生じさせるので、(理由は) 定まらない。」といえ、そのようではあろうが、諸事物は本性として無いと成立した。それ故に、本性として有ると語ることを手放して、本性の無い因果を語る我々に、後続するとなるだろう。本性として成立したことは何も無いので、相反するものは無い故に、本性として無い事物も自性として無いので、(理由が) 定まらないとも何処でなろうか。

我々のようであれば、「影像」という主体は本性として成立したことが無ければ、その性質も本性として成立したことは無いので、それは本性の有無何れにおいても自性として成立したと主張しない。

先に空・不空である果が生じることを否定したことは、果の方面からであるが、ここで自性として有る・無い果が生じることを否定したことは因の方面からであるので、重複しない。



## 第二項 [因そのものが本性として有ることを否定する]

「もしまた、因が、果が生じる行為を準備することを否定はしたとしても、因は本性として有る。(何故ならば) 否定していない故である。然れば、果も本性として有る。」といえ、因が果を本性として生じさせるのでなければ、因そのものも本性として有ることは合理とはならない。

『仮に、因が本性として有ることを否定はしたとしても、果は本性として有るが、然れば因も本性として成立したとなる。』と思えば、因そのものが本性として有ることは合理でなければ、本性として有るその果は如何なる因の果となろうか。(因の果とは) ならない。

## 第三項 [因縁の集合より生じることを否定する他の正理を示す]

もし、「因のみが、果が生じる行為を準備するものではないが、因と縁が集まることによって因を生じさせる。」といえ、それは正理ではない。(何故ならば) 先に既に否定した故である。

他にも、そのように考えるならば諸因と諸縁の集合であるものが、自らによって自らを生じさせるか、生じさせないか。

集合自体が(自らの)我性を生じさせない。(何故ならば) 果が生じることは無意味である故と、自らに対して行為することは矛盾する故と、集合は実質として無いので、果の生は良く準備するものに自性として無い故である。そのように実質として無いものが自らの我性を生じさせなければ、その集合が如何様に果を本性として生じさせようか—生じさせない。石女の子の如くである。集合が自と他を自性として生じさせない故に、因縁の集合が為した—生じさせられた果は、自性として無い。

『ブッダパーリタ』より、集合が自らの我性を生じさせない意味とは、集合が自らの自性として成立していないことであると説く。

もしまた、「因縁の集合が為した果が無ければ、ならば因縁の集合でないものが為した果が有る。」といえ、因縁の集合より本性として生じさせられた果が無ければ、非常に矛盾する。因縁の集合でないものが為した果は無い。

もしまた、「果は本性としては無いだろうが、因縁の集合は本性として有る。それ故に、果も本性として有る。」といえ、斯くも説かれた正理によって尽く分析したならば、果が本性として有るのでなければ、縁の集合が本性として何処に有ろうか。(それは) 無い。

## 第二項 [了義の教証と合わせる]

そのように、「因と縁二つの集合とそれぞれより果が起こることは、本性として成立していないと示したこと自体、深甚な教証によっても成立したことと、そのよ

うに示された一切の善説は本性によって説明したまえ。」と示す為に、了義の教証の一部と合わせれば、『大遊戯経』より、

「唇と喉と口蓋に依拠して、舌が動かされることより文字の発音が起こるけれど、喉に依拠してではなく口蓋よりではない。それぞれにおいて文字（の音声）は認められない。その集合に依拠してその言葉は、心意に従って起こるのではあるが、意と言葉は現れず形は無く、内と外にも認められるものとして無い。賢者が、言葉の発音音声と旋律の、生と壊について尽く考察したならば、その時全ての言葉はこだまのようであり、同音で精髓が無いと見る。」

と、言葉の音声は因と縁に依拠して起こることと、分析されれば本性は無いことと、そのように起こることも心の力によってであると説かれた。

「この非常に喜ばしい教示においては」<sup>6</sup>

等の先に引用したものと、『般若波羅蜜経』よりも

「コウシカよ。大鎧を着けたその菩薩大菩薩は、色形に留まることをするな。」  
や、

「残りの四蘊<sup>7</sup>と、四果<sup>8</sup>と、独覚と、完全なる仏陀に留まることをするな。」  
と説かれた。

### 第三項 [意味を要約して章の名を示す]

『ブッダパーリタ』より

『もし、時も無い。因と果と集合も無ければ、他の何が有ろうか。そう見るので、それはまさしく虚無を語るのだ。』

説く。そうではない。（君が）時等は自性より存在すると尽く考えるよう

6 「この…おいては、」：『優波離請問経』第 7 章 [前述の典拠を挙げる] 171 頁参照。

7 残りの四蘊：色蘊以外の、受蘊・想蘊・行蘊・識蘊。

8 四果：声聞聖者の四種の修行の果。

預流果：四果の一。声聞の第一の果。見所断（見道で捨て去るべきもの）を捨てて、静慮地（禅定）を得る障害になる欲界の荒い煩惱を捨て去るまでの声聞聖者の修行果。

一來果：四果の一。声聞の第二の果。見所断（見道で捨て去るべきもの）を捨てて、静慮地（禅定）を得る障害になる欲界の殆どの煩惱を捨て去り、来生に欲界の生を一度経過して阿羅漢果を得るだろう声聞聖者の修行果。

不還果：四果の一。声聞の第三の果。見所断（見道で捨て去るべきもの）を捨てて、静慮地（禅定）を得る障害になる欲界の煩惱を捨て去り、来生に欲界の生を受けずに阿羅漢果を得るだろう声聞聖者の修行果。

阿羅漢果：阿羅漢果。四果の一。声聞の第四の果。見所断・修所断（見道・修道で捨て去るべきもの）を捨て去り、解脱を得た声聞聖者の修行果。

には不合理であるに尽きるが、それらが依拠して名付けられたとは成立する。」

と説かれたように、時と因果と縁の集合は、实在論者達が自性として有ると主張する如くには無いので、それを否定するが、因と縁に依拠して起こる縁起が有ることは、否定していないと知りたまえ。

「集合を考察する」という二十四偈の我性、第二十章の解説である。